

## ② 泌尿器科領域における薬物副作用に 対しての補中益気湯の効果 (抗癌剤、新規ホルモン製剤に対して)

那覇市立病院 泌尿器外科  
玉城 光由、大城 琢磨

### 【背景】

現在、従来の抗癌剤に加え、分子標的薬、新規ホルモン剤を含むさまざまな新規薬物が導入され、転移や再発を含めた患者の生存率は延長していると思われる。しかし、その薬剤の副作用は汎血球減少など骨髄抑制に加え、食欲低下、倦怠感などさまざまな病態を誘発する可能性が高く、その頻度も少なくない。泌尿器科領域における薬剤の副作用(倦怠感、食欲不振など)に対して補中益気湯の内服の有無で副作用の軽減、患者のQOLの上昇が期待できるか検討した。

### 【方法】

2019年1月より尿路上皮癌、前立腺癌で化学療法を施行した患者および前立腺癌で新規ホルモン剤を投与した患者を対象とした。補中益気湯を内服した症例が11例、内服していない症例が11例で採血とアンケートを1ヶ月に1回施行し評価した。観察期間は補中益気湯内服した群で開始3ヶ月前より内服後6ヶ月の9ヶ月、内服していない群は6ヶ月とした。

採血の評価項目は(①Alb②PreAlb③WBC④CRP⑤好中球)で、倦怠感の評価についてはCancer Fatigue Scale(身体的、精神的、認知的、総合的倦怠感を点数化)を使用し検討した。

### 【結果】

採血ではPreAlbの経過で補中益気湯内服3ヶ月前より徐々に低下するが内服開始後1ヵ月後から6ヶ月後まで持続的に上昇を示した。Cancer Fatigue Scaleについて、精神的倦怠感以外の3項目で緩やかに改善傾向を認めた。

### 【結語】

補中益気湯はPreAlbの上昇により栄養状態を改善させ、かつ緩やかに倦怠感を改善する可能性がある。